

ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』 (1882年) 試訳と注解 (4) 「オスカー・ワイルド氏」(上)

川端康雄・井上亜紗・海老名恵・押田昊子・花角聡美

はじめに

第4回は「オスカー・ワイルド氏」(Mr. Oscar Wilde)の章の前半部分の試訳と注解を掲載する。『英国の唯美主義運動』の現テキストには章番号が附されていないが、併せて10章で構成されていて、オスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)を扱ったこの章は第9章に当たる。原書で26ページにわたり、もっとも紙数を割いている章で(ジョン・ラスキンの章の倍以上ある)、本書のなかで「唯美主義運動の主唱者」として大きく扱うに値する人物と著者がみなしていたことがわかる。そういう次第で本誌で全編を一挙に載せるには分量が多すぎるということで、今号と次号とで分載することとした。

この前半部分では、ワイルドの両親の略歴から書き起こし、オクスフォード大学での彼の学生生活を関係者の証言から浮かび上がらせ、イタリア旅行の経験とニューディゲイト賞受賞作品「ラヴェンナ」(1878年)を紹介し、初期の詩作品を何篇か長めに引用し、それらの特徴を分析している。本書の刊行時点(1882年)でワイルドが発表した著作は詩作品が中心で、「ラヴェンナ」のあと(早世した妹を追悼した「レクイエスカト」の私家版をはさんで)、『詩集』(*Poems*)を1881年に刊行、しかしこれはD. G. ロセッティやスウィンバーン、あるいはウィリアム・モリスら、ラファエル前派系の詩と酷似したところがあり、各方面から剽窃、盗用の嫌疑がかけられることにもなった。現にロセッティははっきり不快感を表明しているし、『パンチ』誌の匿名記事はオリジナリティの欠如を揶揄し、オクスフォード・ユニオン(伝統ある「雄弁部」の学生組織)はワイルドが進呈した『詩集』を(紛糾した議論の末に)返却してきた(Sturgis, pp. 187-88を参照)。しかしながら本書でのハミルトンによるワイルドの詩の扱いは好意的なもので、それらの詩篇が唯美主義思想を表現していると高く評価している。

本書が出た1882年、ある種の「セルフ・プロデュース」が功を奏して著名人となっていたものの、後世に決定的に名を残すワイルドの主著はまだ書かれていない。童話集『幸福な王子とその他の物語』(1888年)も、『ドリアン・グレイの肖像』(1890年)も、戯曲『サロメ』(1890年)も、『真面目が肝心』(1895年)ほかの(いまもよく再演される)風習喜劇も、あるいは「虚言の衰退」(1889年)や「社会主義下の人間の魂」(1891年)ほかの重要な批評も、ワイルドのこれからの仕事となる。1895年の「ワイルド裁判」で二年間の懲役刑を受けて(同時代の)社会的地位を失

う（そしてその牢獄で『獄中記』という絶唱が書かれる）ことになる未来などまったく想像も及ばない、売り出し中の春秋に富む気鋭の唯美派詩人の仕事に、この年長の先駆的な英国唯美主義運動史家は相当に惚れ込んでいて、批判者たちから彼を擁護し、今後の文学的展開に大いに期待を寄せている。既にして毀誉褒貶の激しかったワイルドについて、褒め称えた評論の意義深い例としてこの章を捉えることができるだろう。詩を特定のイデオロギーで評価すべきでないとしつつも、ワイルドが民主主義の普及を忍耐強く待つ「共和主義者」であることの証左として長詩「女帝に幸あれ」(Ave Imperatrix)を引用し、また（引用はしていないが）劇詩『ヴェラ、あるいは虚無主義者』(Vera, or the Nihilist)を「民主主義思想に基づく強烈な場面が描かれている」と評しているところなど、ハミルトン自身が政治的な思想信条の点でも共感を覚えていたことが見て取れる。

ワイルドの経歴（当然1882年までの経歴ということになるが）について記述するにあたって、関係者の多くが存命で、現に進行中の唯美主義運動を扱うのにまさに生きた証言を得られるというメリットがあり、ハミルトンはそれを十分に活用している。ただし事実誤認もある。その最たるものがワイルドの年齢で、正しくは1854年10月16日生まれなのだが、本書の記述では「1856年10月15日生まれ」としている。これはしかしハミルトンの誤記というよりはワイルド自身が年齢を2歳若く申告していたのだった。これはのちに1895年の「ワイルド裁判」で暴露される「年齢詐称」で、陪審員の心証を悪くする一因となる。ハミルトンはワイルドの伝記的事実を押さえるのに母親の「スペランザ」ことレイディ・ワイルドに取材していたはずであるが、それにもかかわらず生年を間違えているということは、母親も息子の詐称に目をつぶっていたということなのかもしれない。

1882年にワイルドは北米大陸で講演旅行をしていた。本章の後半部分でその講演旅行の模様(米国の新聞の載ったインタビュー記事や講演の採録など)がかなり詳しく紹介されていて、北米(合衆国とカナダ)でのワイルド受容を英国の読者層にいち早く知らせるものとなっている。これについては次号の後半部の試訳と注解において見ていく予定である。(川端康雄記)

* * *

オスカー・ワイルド氏

オスカー・ワイルド氏のような非常に若い人物の名がかくも知れわたり、公衆の耳目を集めるのはじつに稀有なことで、彼が得た名声をもっぱら彼自身の誇示の結果とみなすのは事実反するし、誉めたことにもならないだろう。とりわけ『パンチ』誌がそうだが、一部の雑誌が彼個人に対して浴びせてきた下品な誹謗中傷は言語道断である¹⁾。オスカー・ワイルド氏は生まれも、教育も、礼儀正しい態度も、また外見上も、紳士である。氏を敵視する人びとのなかにはとても紳士とは言い難い者が含まれる。そして、氏に対する攻撃は実際にはことごとく氏の講演や詩の

1) オスカー・ワイルドの恰好や行動は目を引いた。ジョージ・デュ・モーリア (George du Maurier, 1834-96) が『パンチ』誌に掲載した彼のカリカチュアはロンドン中に広まり、虚実ないまぜにして噂の的になった。

宣伝となっているのだが、だからと言って、日毎に活字化される氏についての誹謗やひどい虚言を駆り立てる動機が正当化されるはずもない。氏の行動と衣服に嘲笑が浴びせられてきたのは不当である。同様に、唯美主義者のなかのより熱烈な層が氏を自分たちの極端な思想の主唱者として祭り上げて、氏の詩をやたらと褒めちぎっているのだが、こちらもやはり度が過ぎている。

オスカー・オフラハティ・ウィルズ・ワイルド氏はアイルランド出身である。父親の故サー・ウィリアム・R. ワイルドは高名な医師で、ダブリンのメリオン・スクエアで長年開業していた。サー・ウィリアム・ワイルドは1815年頃に生まれ、眼疾と耳疾を研究し、その専門領域で高い権威として認められ、1853年に女王の勅撰眼科医に任命された。

彼は三度、アイルランドの国勢調査委員に任命され、その功績により1864年にアイルランド総督からナイト爵に叙せられた。

彼は、文学趣味と考古学の博識を有する人物としても際立っていた。著作は医学書に加え、『ボイン川の景勝』や、『アイルランド、過去と現在——土地と人びと』という講演録や、ダブリンのセント・パトリック大聖堂の司祭だったジョナサン・スウィフトの晩年の話を書いた。しかし、彼の主著は『ロイヤル・アイリッシュ・アカデミーにおける古事物一覧』という、その学術協会所蔵の貴重で興味深い展示品に関する学術研究書である。彼は同協会の会長に選出された。

1851年にサー（当時はミスター）・ウィリアム・ワイルドは、ウェックスフォードのアーチディーコン²⁾・エルジーの孫娘のジェイン・フランセスカ・エルジーと結婚した。ジェインはダブリンの文学界ではよく知られた女性で、多くの詩を書き、1848年という政治的動揺の高まった最中に『ネイション』誌に発表した。それらの詩は「スペランザ」というペンネームで出された³⁾。もちろんアイルランドの民族運動の大義に賛同する詩であった。これはいまでも注目に値するもので、いずれ英国の政治家たちから（これまでには一度もなかった）十分かつ公正な評価が与えられるはずである。さもないければ内戦が勃発し、イングランドとアイルランド双方にとって悲惨な結果になるだろう。

レイディ・ワイルドの詩は、のちに『スペランザ詩集』と題する詩集にまとめられた。これには「フィダンツァ、スペランツァ、コンスタンツァ」というモットーが掲げられている⁴⁾。グラスゴウのキャメロン・



図1 『スペランザ詩集』の口絵とタイトルページ

- 2) アーチディーコン (Archdeacon) は英国国教会の主教 (bishop) に次ぐ高位の役職。「大執事」とも。
- 3) ジェイン・フランセスカ・アグネス・エルジー (Jane Francesca Agnes Elgee, 1821-96) の家系は元々イタリア系で、彼女はイタリア語で「希望」を意味するスペランザ (Speranza イタリア語読みでは「スペランツァ」という名を自らにつけ、好んで用いた。ドイツ語やフランス語にも堪能で、小説を翻訳し、多くの雑誌に寄稿したほか、『ネイション』誌で1845年のアイルランド飢饉をうたう詩で、アイルランドのナショナリズムに影響を与えた。オスカー・ワイルドは母を敬愛し、『獄中記』のなかで、「わが母はエリザベス・ブラウニングにも匹敵する知性の持ち主」(my mother, who intellectually ranks with Elizabeth Barrett Browning) と記し、彼が獄中にいた1896年に失意のうちに死んだ母を悼んでいる (Wilde, *Complete Works*, p. 1045)。
- 4) “Fidanza, Speranza, Constanza.” イタリア語で「信仰、希望、志操堅固」という徳を表す。

アンド・ファーガソン社から出たこの詩集にはレイディ・ワイルドの肖像画が掲載され、アイルランドに捧げられている〔図1〕。その詩集には、その国の状態についての短詩が多く収録されている。その一篇は、「1798年に処刑されたヘンリー・シアーズとジョン・シアーズ兄弟」⁵⁾についてであり、以下の詩行を含む。

されどふたりの^{きそく}羈束を断ち切らんとて現れ出る者はひとりとしておらず。

ああ！ 思うに、われがその場に居合わせておれば

^{ちたび}千度の死をも賭したであろう、

剣がふたりの髪に触れるその前に。⁶⁾〔*原注1〕

〔*原注1〕これは空疎な自慢ではなかった。というのも、レイディ・ワイルドは、彼女の高潔さを「48年」に証明している。その年、民族独立を説く一新聞〔『ネイション』〕の編集長が起訴され、法廷で罪状証拠として記事が取り上げられた際に、傍聴席にいた彼女は立ち上がり、検察官たちに向かって、「私がこの記事の執筆者です」とはっきり宣言したのだった。⁷⁾

飢饉や人口減少、英国の悪政についても言及がある。また、ダニエル・オコンネルに向けた一編の詩と、1869年に亡くなった作家のウィリアム・カールトンに向けた別の詩もあった。この書の第二部は主に翻訳で構成されている⁸⁾。

1863年に、レイディ・ワイルドは、『最初の誘惑、あるいは汝ら神のごとくならん』⁹⁾と題する、奇妙で力強いドイツ語の小説を翻訳した。これは現代ドイツにおける最高の小説作品のひとつで、形而上学的な力を大いに備えている。主人公はヘーゲル派の哲学者で、美の崇拜を自らの信仰としている。英国の出版社はそうした観念が読者の信仰や倫理観を揺るがすことを恐れたのかもしれないが、いずれにせよ、その本が(偶然とみなされているが)ほぼすべて焼失してしまったので、

5) ヘンリー・シアーズ (Henry Sheares, 1753–98) とジョン・シアーズ (John Sheares, 1766–98) の兄弟は、アイルランドの民族主義的組織であるユナイテッド・アイリッシュメン協会 (Society of United Irishmen, 1791–1805) の一員としてカトリック解放運動を起こしたが、1798年に起こした反乱を理由に英国当局によって処刑された。

6) “Brothers.” “Yet none spring forth their bonds to sever, / Ah! methinks, had I been there, / I’d have dared a thousand deaths ere ever / The sword should touch their hair.” (Speranza, p. 9.)

7) レイディ・ワイルドは1848年に、愛国者を鼓舞する「勇気」と題する詩を『ネイション』誌に発表した。その後、1882年にオスカー・ワイルドはアメリカで「1848年のアイルランド詩人たち」(The Irish Poets of 1848) と題する講演をおこない、その詩を朗読した。

8) ダニエル・オコンネル (Daniel O’Connell, 1775–1847) はアイルランド解放運動の指導者で、下院議員をつとめた。1843年に民族集会を指導した罪で逮捕される。無罪の判決を得るもイタリアで非業の死を遂げる。ウィリアム・カールトン (William Carleton, 1794–1869) は1840年代のアイルランド飢饉前後の風俗を題材に小説を書いた。代表作に *Traits and Stories of the Irish Peasantry* (1830–35) など。

9) 『最初の誘惑、あるいは汝ら神のごとくならん』(*The First Temptation, or Eritis sicut Deus*) はレイディ・ワイルドによる英訳のタイトル。ドイツ語原書のタイトルは『汝ら神のごとくならん——匿名の小説』(*Eritis sicut Deus: Ein anonymes Roman*) で1855年に刊行された。その作者はヴィルヘルミーネ・カンツ (Wilhelmine Canz, 1815–1901) という女性作家・教育学者だった。

結果としていまや希少なものとなっている。彼女はさらに、アレクサンドル・デュマ、ラマルティエール、その他の作品を多数翻訳し、またロンドンのさまざまな雑誌に散文や詩を寄稿した¹⁰⁾。

レイディ・ワイルドは一時期ロンドンで、息子のウィリアム・チャールズ・キングズベリー・ワイルド（文学修士）と同居していた。彼が雑誌に掲載した一連の詩もそれなりの注目を集めている¹¹⁾。

オスカー・ワイルドはダブリンで1856年10月15日に生まれた。するといまは26歳ぐらいということになる¹²⁾。だが、その短いキャリアながら将来有望である。極めて知的な両親のもとに生まれた彼は、非凡な教育を受け、荒涼とした遠隔地の——古典文学の地ではあるが——国々を何度も旅してきた。そして、これらの旅をとおして、古^{いにしえ}の著述家たちの美的価値を賞味することを学び、大学で古典作品を読み解く類まれな学識を修得した。しかし、生来の情熱的な気質に導かれて、彼は過去に成就された以上の良きものを未来に期待し、また教育と文化によって、人びとが、先祖の偉業のみならず、自分たちの達成についても誇れるように教えこまれたときに、来たるべき〈知〉のデモクラシーに対して〈学芸〉の影響がいかに広いものであるかを理解している。エニスクリンのポトラ・ロイヤル・スクール（イートン校のアイランド版）¹³⁾で約一年過ごし、オクスフォード大学に進学する前に、オスカー・ワイルド氏は、生まれ故郷のトリニティ・コレッジで一年間学び、16歳という異例の若さで西洋古典学の奨学金を獲得し、翌1874年にはギリシャ古典文学でパークリー・ゴールド・メダルを受賞した。その年に彼が選んだ専門的トピックはギリシャ喜劇詩人についてであった。そこから、オクスフォード大学のモードリン・コレッジに進み、そこでも優秀者奨学金を獲得した¹⁴⁾。

1877年の休暇中に逍遙の旅に出て、ギリシャに向かう途中にたまたまラヴェンナを訪れて、その古都についての詩の素材を見つけた¹⁵⁾。すると奇しくもその直後に「ラヴェンナ」がニューディ

10) アレクサンドル・デュマ・フィス (Alexandre Dumas fils, 1824-95) または小デュマはフランスの小説家で『椿姫』などを残した。父は『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』を書いたアレクサンドル・デュマ・ペール (Alexandre Dumas, 1802-70) または大デュマ。アルフォンス・マリー・ルイ・ド・ブラ・ド・ラマルティエール (Alphonse Marie Louis de Prat de Lamartine, 1790-1869) はフランスのロマン派詩人。

11) オスカーの兄ウィリアム・ロバート・チャールズ・キングズベリー・ワイルド (William Robert Charles Kingsbury Wilde, 1852-99) はジャーナリストだったが詩作も残している。

12) 正確にはワイルドの誕生年月日は1854年10月16日。著者ハミルトンの誤記というのではなく、ワイルド自身が年齢を2歳低く偽っていたためだろう。本書の「第三版へのまえがき」（川端ほか「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』（1882年）試訳と注解（1）」21）で明かしているように、著者はレイディ・ワイルドから直に情報を得ているので、彼女も口裏を合わせていた可能性が大いにある。1895年の裁判ではこの年齢詐称が明るみに出て心証を悪くする一因になった。

13) ポトラ・ロイヤル・スクール (Portora Royal School) は現在の北アイランド北部ファーマナー県の県都エニスクリンにある17世紀初めに設立された名門パブリック・スクール。

14) ワイルドは1874年にオクスフォード大学モードリン・コレッジに入学し、年95ポンドの奨学金を獲得した。フィレンツェ美術に関するラスキンの集中講義を受けた後、翌年の夏にワイルドはトリニティ・コレッジ時代の恩師で古代ギリシャの研究者だったジョン・ペントランド・マハフィ教授 (John Pentland Mahaffy, 1839-1919) とともにイタリアを訪れた (Sturgis, pp. 102-6)。

15) ラヴェンナはイタリア北東部のアドリア海岸に近い古都で、紀元前5世紀頃から西ローマ帝国の事実上の帝都となり、その後も東ゴート王国期に続きローマ帝国の下でも繁栄を誇ったが、ローマがイタリアの首都に選ばれ、次第にラヴェンナは荒廃した。

ゲイト賞の応募主題として出され、1878年6月26日に、モードリン校生オスカー・ワイルドによるニューディゲイト賞受賞詩としてオクスフォードの講堂で「ラヴェンナ」が朗読された¹⁶⁾。

おお、寂しきラヴェンナよ。幾多の物語が
汝の古^{いにしえ}の大いなる栄光を伝える。
大いなる勝利に向けて進むカエサルを
汝が目にし日より数えて、二千年が過ぎ去りぬ。¹⁷⁾
ローマの瘦身の鷲たちがブリテン島より、遙かユーフラテスの青き川へと
飛翔せしとき、汝の名声は大いなるものとなりき。
汝は数多の種族の高貴なる女王なりき、
ゴート族とフン族が汝の街に出来^{しゅったい}せるまでは。
ひとにより王位を剥奪され、海に見捨てられ、
汝は眠る、寂しき惨めさに揺すぶられつつ。
松林のごとく数多の汝のガレー船が
波立つ潮流の上に浮かぶことなどもはやなく、
真鍮の舳先の船がかつて浮がびしところでは、
いまは疲弊せる羊飼いの笛が悲しげな調べを奏でる。
かつてアドリアの深紅色の水が流れしところを
いまは白き羊たちが気の向くまま往来せる。

おお、麗しや！ おお、悲しや！ おお、慰められざる女王よ！
姉妹のなかで汝ただひとり、美しき廃墟に
死して横たわる。なぜならついに
イタリアの王家の戦士が
ローマのいとも壮麗な門を抜け、冠を戴きしゆえ、
永遠の都の高き神殿でのこと。
パラティヌスはおのが王の帰還を歓呼にて迎え、
彼の名を呼んで七つの丘が鳴り響く！

ナポリは痛ましき夢を生き延び、
暴君をあざ笑う！ ヴェネツィアは蘇り、
新たに水中から立ち現わる！ して、

16) ワイルドは1877年にイタリアからギリシャを回る旅の途中にラヴェンナに立ち寄っている。「ラヴェンナ」は7節332行の長詩。この詩は1878年にニューディゲイト賞（Newdigate Prize）を受賞して、オクスフォードのシェルドン講堂でワイルドにより朗読された。ニューディゲイト賞は、ラスキンも受賞している。「ジョン・ラスキン」の章の原注1および、注1を参照（川端ほか「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義』（1882年）試訳と注解（2）」50頁）。

17) 紀元前49年にカエサルはラヴェンナでローマ征服に立ち上がった。ルビコン川を渡る際に「賽は投げられた」と言ったことが知られている。

光と真実、愛と自由を求めて叫ぶ声が
威風堂々と、ジェノヴァにて聞こゆる。
ミラノの大理石の尖塔が空気を貫くごとく
アルプスからシチリアの海岸まで鳴り響き、
ダンテの夢ももはや夢にあらず。

されど、誰よりも愛されし汝ラヴェンナよ、
汝の朽ち果てし宮殿は
汝の偉大なる零落を隠すための棺衣に過ぎぬ！　して汝の名は
灰色に揺らめく蠟燭の炎のごとく燃える。
新しきイタリアの
真昼の太陽の輝きのもとで！¹⁸⁾

この詩はのちにオクスフォードのT. シュリンプトン・アンド・サン社から出版された。そこには以下の献辞が添えられている。

わが友

ジョージ・フレミング

『ナイルの小説』と『ミラージュ』の著者に捧ぐ¹⁹⁾

18) "Ravenna." "O lone Ravenna! many a tale is told / Of thy great glories in the days of old: / Two thousand years have passed since thou didst see / Caesar ride forth to royal victory. / Mighty thy name when Rome's lean eagles flew / From Britain's isles to far Euphrates blue; / And of the peoples thou wast noble queen, / Till in thy streets the Goth and Hun were seen. / Discrowned by man, deserted by the sea, / Thou sleepest, rocked in lonely misery! / No longer now upon the swelling tide, / Pine-forest like, thy myriad galleys ride! / For where the brass-peaked ships were wont to float, / The weary shepherd pipes his mournful note; / And the white sheep are free to come and go / Where Adria's purple waters used to flow. // O fair! O sad! O Queen uncomforted! / In ruined loveliness thou liest dead, / Alone of all thy sisters; for at last / Italia's royal warrior hath passed / Rome's lordliest entrance, and hath worn his crown / In the high temples of the Eternal Town! / The Palatine hath welcomed back her king, / And with his name the seven mountains ring! // And Naples hath outlived her dream of pain, / And mocks her tyrant! Venice lives again, / New risen from the waters! and the cry / Of Light and Truth, of Love and Liberty, / Is heard in lordly Genoa, and where / The marble spires of Milan wound the air, / Rings from the Alps to the Sicilian shore, / And Dante's dream is now a dream no more. // But thou, Ravenna, better loved than all, / Thy ruined palaces are but a pall / That hides thy fallen greatness! and thy name / Burns like a grey and flickering candle-flame, / Beneath the noon-day splendour of the sun / Of New Italia!" (Wilde, *Ravenna*, pp. 11-12.)

19) "To my Friend, / GEORGE FLEMING, / Author of 'The Nile Novel,' and 'Mirage.'" ジョージ・フレミング (George Fleming) は、コンスタンス・フレッチャー (Constance Fletcher, 1858-1938) のペンネーム。アメリカ生まれで、イタリアと英国を歩き来して過ごした。1877年に2つの小説『ナイルの小説』(*A Nile Novel*) と『ミラージュ』(*Mirage*) を出版し、ロンドンの文壇で注目を集めた (Showalter, p. 321)。

オクスフォード在学中、ワイルド氏はラスキン氏によるフィレンツェ派美術についての講義²⁰⁾に出席した。さらには、かの風変わりな師の教えと手本に従って、精神のみならず肉体も鍛錬せんとして、道路作りの仕事に加わった²¹⁾。だがあいにくラスキン氏はワイルド氏が入学した年の一学期〔秋学期〕が終わるとヴェネツィアに向け旅立った。とはいえ、ラスキン氏はすでに大勢の若い学生たちに審美眼を植え付けていたのだった。ワイルド氏は、多くの人がオクスフォードでもっとも美しいと考えるコレッジ²²⁾のなかの、川を見下ろす、趣のある古い羽目板張りの数部屋に居住していた。天井を彩飾し、瀟洒な腰羽目を入れ、室内は国内外で集められた貴重な美術品で溢れかえっていた。ここで氏は社交の集いを催した。美術や音楽や詩に関心のある人びと、また大体においてそのいずれかを大学の正規の科目に加えて実践している者たちがここに集まったのである。

当時のワイルド氏を知る人物が彼のオクスフォードでの生活ぶりを以下のように表現している。

彼はすぐさま芸術や陶磁器に関する独自の趣味を披露しはじめ、オクスフォードに来てそう時を経ぬうちに彼の部屋はコレッジのみならず大学全体のショールームのようなものとなった。幸運にも彼はコレッジのなかでも最上の部屋に入ることができたのだ。キッチン階段室と呼ばれるところの上で、チャーウェル川や美しいモードリンの小径、またモードリン橋の素晴らしい眺めを見晴らせる。三部屋あって、壁は全面板張りだった。2部屋の居間はアーチで繋がれ、かつては折れ戸が取り付けられていた。目利きによると彼の青磁は大変貴重な極上品とされており、それがたつぷりとあった。古い版画が板張りの壁一面に飾られていた——主に麗しき性〔女性〕を描いた版画で、自然が纏わせる芸術的な装いで描かれている。彼は客人を温かくもてなし、日曜の夜、「談話室」のあとには、たいいて彼の部屋が懇親の場となった。気質も趣味も多種多様の学生たちがその部屋に集い、パンチやブランデー・ソーダを飲み、葉巻をくゆらせた。あるとき、こうした宴のさなかに、「ああ、私の青磁に恥じないように生きたいものだ！」という彼の有名な台詞を口にしたのだった²³⁾。乗馬がいちばんの楽しみだったのだが、狩猟に耽ることはけっしてなかった。クリケット場によく顔を見せたが、自身が競技に興じることはなかった。そして学寮対抗五月レースでエイト²⁴⁾を見物するために自分のコレッジのはしけまでいつも来ていたが、なにぶん巨漢なものだから、みずから漕ぎ手になることは遠慮したのだった。

20) 「フィレンツェ美術における唯美派と数理派」(The Aesthetic and Mathematic Schools of Art in Florence) という題目で1874年の第一学期(秋学期)の11月10日から12月4日まで8回にわたって講義がおこなわれ、ワイルドはこれをすべて聴講していた(Ellman, pp. 46-47)。

21) 1874年ラスキンは学生たちと共にオクスフォード郊外のノース・ヒンクシーでアップパー・ヒンクシーとロウアー・ヒンクシーを結ぶ道路の建設工事をおこなった。この工事はラスキンがヴェネツィアに行ってしまったため「土工たち」(diggers)は解散し、道路は完成しなかった。

22) モードリン・コレッジを指す。

23) “Oh, would that I could live up to my blue china!”『パンチ』誌の1880年10月30日号でジョージ・デュ・モアリエの風刺画に用いられたキャプション(Ellman, pp. 43-44)。

24) オクスフォード大学祭期間、5月頃行われる学寮対抗ボートレース。エイト(eight-oar)は8人の漕手と1人の舵手で争う競技。

以上のような面があったのだが、1876年のトリニティ学期中²⁵⁾、読書中の姿がめったに見られなかったにもかかわらず、ワイルド氏は第一次学士試験において古典学の全科目で第一級の成績を収めた。その後、数か月間をギリシャとパレスチナを旅することに費やした。下級奨学金に加えて、1878年には英語の韻文に贈られるニューディゲイト賞を受賞し、同年6月には人文学で第一級をとり、学位を取得した。

この時期、彼は多くの詩を創作した。そのなかにはイタリア訪問の成果が含まれ、ローマ・カトリック主義への熱情であふれんばかりであった。その熱情はフィレンツェ、ローマ、ミラノを初めて訪ねた際に、その宗教の荘麗な神殿のなかに示される光輝ある芸術によって必ず信徒たちの胸の内にもたらされるものである。

これらの詩は『月』（*The Month*）に何編か、他に『カトリック・モニター』（*Catholic Monitor*）や『アイリッシュ・マンスリー』（*Irish Monthly*）に発表された。多くの短詩もダブリンのトリニティ・コレッジのメンバーを執筆者とする小雑誌『コッタボス』（*Kottabos*）に載った。その後、これらの詩のほとんどが彼の詩集に採録された。それゆえ、「マルゲリートのバラード」（*Ballade de Marguerite*）は、1879年『コッタボス』の初出形ではこうなっていた。

麗しのマルゲリート

中世のバラード

ぼくはもういつまでも狩り場にいるのはうんざりだ、
騎士たちは市場で会っているというのに。

いや、おまえ、赤い屋根のあの町になぞ行っちゃいけない、
行ったら戦馬の蹄に踏み倒されてしまうからね。

でもぼくは騎士^{スクワイア}の従者^{ヒト}らが馬で行くところには行かない、
ただ好きなあの貴婦人のそばにいたいだけなんだ。

おやまあ！ おまえときたら、なんと気が大きなこと！
^{フォレスト}森 番の息子が黄金を糧に暮らすなどできまいに。

父さんが聖マルタン祭²⁶⁾のたびに緑の胴着^{ダブレット²⁷⁾}をまとうのを見たからといって、

25) トリニティ学期 (Trinity term) は英大学の第三学期、4月中旬から6月中旬頃まで。オクスフォード大学では、第一学期に当たるミクルマス学期 (Michaelmas term) が10月初めからクリスマス直前まで、ヒラリー学期 (Hilary term) がクリスマス休暇明けからパーム・サンデー (Palm Sunday 復活祭直前の日曜日) の前日までとなっている。

26) 聖マルタン祭 (Martinmas) はフランスの守護聖人 St. Martin を記念して11月11日に行われる。

27) ダブレット (doublet) は15-17世紀に流行した身体にぴったりした男子用上衣。二重仕立てになっている。緑色のダブレットの着衣は森番の身分を示す。

あの女^{ひと}のぼくへの愛が弱まったりするものか。

おまえの羊皮の外套は見るからに粗末なしろもの、
それにひきかえ、おまえの好きなあの貴婦人^{ひと}は深紅色^{クラモイジー}の布をまとっている。

おやまあ！ それじゃあ、まことの愛は失せるのか
ひとりが絹を、もうひとりが粗紡^{フリース}の毛織²⁸⁾をまとうとき！

あの女^{ひと}は綴れ織^{タペストリー}を手がけているのかもしれないね、
紡錘^{つむ}と織機^{おりはた}はおまえには似合わないよ。

あの女^{ひと}がまばゆいアラス織²⁹⁾を織っているのなら、
ぼくは明るい炉端でもつれた糸をほどいてあげよう。

あの女^{ひと}は鹿狩りをしているのかもしれないね、
丘や沼を超えて、おまえがあとを追うなど土台無理。

廷臣たちと狩りをしているのなら
ぼくはあの女^{ひと}の後ろまで駆けて行き、喇叭^{モート}³⁰⁾を吹き鳴らしてあげよう。

あの女^{ひと}はチャペルでお祈りしているのかもしれないね
(あの女^{ひと}の魂にマリアさまがご慈悲をたまわんことを！)

ああ！ あの女^{ひと}が寂しいチャペルで跪き祈りを捧げているのなら
ぼくは香炉をゆすり、鐘を鳴らそう。

なかにお入り、わが息子、顔がひどく青いじゃないか、
お父さんがおまえの盃に麦酒^{エール}を注いでくれるよ。

おお！ このまばゆい装いで行進する騎士たちは誰なのか。
金持ちが楽しむ見世物^{パジェント}なのだろうか？

フランスの王様だよ、海の向こうから、

28) フリース (frieze) はアイルランドが主要産地の毛織物。

29) アラス織 (arras) は美しい絵模様のあるつづれ織。フランスの北部の都市、Arrasが主要産地だった。

30) ハミルトンのテキストでは“wind the mort”とあるが“mort”は“morte”の誤記。文字どおりには「死を鳴らす」だが、これは獲物をしとめた（殺した）際の合図の喇叭を鳴らすことを意味するイディオム。

あたしらの美しい国を訪ねてやってきたのさ。

けれどなぜあんなに低く晩鐘を鳴らすのだろう。

お弔いに来た人たちはなんであんなに並んでいるのだろう。

ああ、あれは、あたしの甥っ子、ダラムのヒューだよ、
硬くなって横たわっている、寿命が尽きたので。

ちがうね、白百合がはっきりと見えるもの。

棺台の亡骸^{なきがら}は、屈強な男ではないね。

ああ！ あれは、お屋敷を守っていたアリスおかみさ。

秋になる頃には身まかるだろうと思っていたんだ。

アリスおかみは麗しき乙女じゃなかった。

アリスおかみはあんな金髪じゃなかった。

ああ、あたしらの知ったひとでも身内でもないよ。

（あの女^{ひと}の魂のためにマリア様が罪をあがないたまわんことを。）

だけど、ぼくには聞こえる、男の子が美しい声で歌っているじゃないか、

「かの女^{エ・レ・モル}は身まかりつ、ラ・マルゲリート！」と。

息子よ、なかにお入り、そしてベッドで休みなさい。

死者の埋葬は死者にまかせようじゃないか。

ああ！ 母さん、知っているよね、ぼくがあの女^{ひと}を心底から愛していること。

ああ、母さん、お墓はふたりのためにひとつあれば、それで足りる。³¹⁾

31) “LA BELLE MARGUERITE: Ballade du Moyen Age.” “I am weary of lying within the chase, / While the knyghtes are meeting in market-place. // Nay, go not thou to the red-roofd town, / Lest the hooves of the war-horse tread thee down. // But I would not go where the squires ride; / I would only sit by my Lady’s side. // Alack! and alack! thou art overbold, / A forester’s son may not eat off of gold. // Will she love me less, that my father is seen / Each Martinmas Day in a doublet green? // But your cloak of sheepskin is rough to see, / When your lady is clad in cramoisie. // Alack! and alack! then, if true love dies, / When one is in silk, and the other in frieze! // Mayhap she is working the tapestry; / Spindle and loom are not meet for thee. // If it be that she seweth the arras bright, / I might ravel the threads by the fire-light. // Mayhap she is chasing of the deer; / How could you follow o’er hill and meer? // If it be that she hunteth with the Court, / I might run behind her and wind the mort. // Mayhap she is praying in chapellrie / (To her soul may our Lady show gramercié!) // Ah! if she is kneeling in lone chapéle, / I might

エドモンド・イエイツの雑誌『タイム』の創刊号は1879年4月に刊行された³²⁾。このなかにはオスカー・ワイルドの短詩が一篇含まれている。この詩は誌名にふさわしく「時の勝利者」(The Conqueror of Time)と題されている。さらに同年の7月号にはもう一篇、この上なく素晴らしい調べの「新しきヘレン」(The New Helen)が掲載された。前述の何篇かは、他にも未発表の詩篇を含めて、オスカー・ワイルド著『詩集』というタイトルで1881年にデイヴィッド・ボーグ³³⁾によって刊行された優美な一巻に収録された。ちょうどこの詩集が刊行される少し前に、バーナード氏の劇『大佐』の上演が始まっていたため、同氏は雑誌のなかで自作品を宣伝しワイルド氏の作品を嘲ることが同時にできたのである。『パンチ』誌に掲載された『詩集』の書評の書き出しはこうだ。

『大佐』に登場するランバート・ストレイク氏は、彼の追従者たちと彼自身のために詩集を出版した。オスカー・ワイルド氏は彼の例にならったのである。

この一文の絶妙な風味と繊細な風刺を理解するためには、この劇の登場人物ランバート・ストレイク氏が唯美主義を装い、幾分おめでたい女性たちを騙して、最後に大佐に正体を暴かれる、つまらぬいかさま師であるということを読めておきさえすればよい。じつはこれは単なる哀れな詐欺師の役柄なのだ。彼の美術品はまがい物で、会話や作法はいとも過激な唯美主義者を馬鹿馬鹿しいまでに大袈裟に誇張したもののなのである。

オスカー・ワイルド氏を浅薄なペテン師になぞらえたあと、雑誌『パンチ』の愛想のよい批評家はこう続ける。

表紙は極上、紙は紛れもなく高価、装丁は美しく、活字も申し分ない。

オスカー・ワイルド著『詩集』——それが唯美派の歌い手の本の標題であり、表紙は白のヴェラムに金の箔押しが施されている。装丁に関してはある程度の独創性^{オリジナリティ}が見られるが、

swing the censer, or ring the bell. // Come in, my son, for thou look'st sae pale, / Thy father will fill thee a stoup of ale. // Oh! who are these knyghtes in bright array? / Is it a pageant the rich folks play? // It's the King of France from over the sea, / That has come to visit our fair countrie. // But why does the curfew toll sae low? / And why do the mourners walk a-row? // Oh, it's Hugh of Durham, my sister's son, / That is lying stark, for his day is done. // Ah, no, for I see white lilies clear; / It is no strong man that lies on the bier. // Oh, it's good Dame Alice that kept the Hall: / I knew she would die at the autumn fall. // Dame Alice was not a maiden fair, / Dame Alice had not that yellow hair. // Oh, it's none of our kith and none of our kin; / (Her soul may Our Lady assoil from sin). // But I hear the boy's voice chaunting sweet, / 'Elle est morte, la Marguerite! // Come in, my son, and lie on the bed, / And let the dead folk bury their dead. // Oh! mother, you know I loved her true: / Oh, mother, one grave will do for two."

32) エドモンド・イエイツ (Edmund Yates, 1831-94) は、ジャーナリスト・小説家・劇作家。雑誌の編集や刊行もおこなった。

33) デイヴィット・ボーグ (David Bogue, 1808-56) は、フリート街のチャールズ・ティルト (Charles Tilt, 1797-1861) の出版社・書店を引き継ぐかたちで創業。主にジョージ・クルックシャンク (George Cruikshank, 1792-1878) が挿絵を手掛ける作品群の出版で知られる。

ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』（1882年）試訳と注解（4）「オスカー・ワイルド氏」（上）

本の中身についてはそうとは言えない。ワイルドは唯美主義者かもしれないが、先駆け^{オリジナル}ではない。これはさまざまなこだまの一書であり、スウィンバーンと水が出てくるかと思えば、著者がロセッティ氏とブラウニング夫人を偲んでいるくんだりも随所に見られる。

要するに、わが唯美派の詩人からほとぼり出た言葉というものは、貧相でもったいぶった代物だと言わねばならない。³⁴⁾

さて、ワイルド氏をわが国のより偉大な詩人たちと比べるつもりはないが、氏がまだ非常に若い人物であることに私は注意を促したい。シェリー、キーツ、バイロン、テニスの初期作品も批評家たちによって「貧相でもったいぶった代物」と評されたではないか。だからワイルド氏がこうした悪意に満ちた批評にそう気を揉む必要はない。なにしろ氏の詩集はすでに4版を重ねているのだ。

クリストファー・ノース³⁵⁾がテニスの第一詩集を酷評すると、未来の桂冠詩人はそれに答えて軽蔑を込めた詩を書いた。これをほんの少しだけ手を加えれば、オスカー・ワイルド用に使えるだろう。

近頃我が韻文を論評せる

頑迷固陋なシャリヴァリよ。³⁶⁾

非難と賛辞を混合せる

錆び付いたシャリヴァリよ。

評の書き手を我は知り

非難のすべてを許容せり。

古臭きシャリヴァリよ。

されど賛辞は許すまじ

カビ臭きシャリヴァリよ。³⁷⁾

とはいえ、氏の詩集が私の手元にあるので、『パンチ』誌の悪意に満ちたコメントによる先入

34) *Punch or the London Charivari* 1881年7月23日号に掲載された、「スウィンバーンと水」(Swinburne and Water) と題された記事より。

35) クリストファー・ノース (Christopher North) は、ジョン・ウィルソン (John Wilson, 1785-1854) の筆名。詩人・ジャーナリスト・批評家として活動した。『ブラックウッド・マガジン』1832年2月号では、アルフレッド・テニス (Alfred Tennyson, 1809-92) について好意的な文章を寄せていたものの、同年5月号では *Poems* の批判をおこなった。これに反応してテニスが発表したエピグラム “To Christopher North” (1832) がここでのパロディの元となっている (You did late review my lays, / Crusty Christopher; / You did mingle blame and praise, / Rusty Christopher. / When I learnt from whom it came, / I forgave you all the blame, / Musty Christopher; / I could not forgive the praise, / Fusty Christopher) (Tennyson, p. 461)。

36) 「シャリヴァリ」(Charivari) の呼びかけは、『パンチ』を指す。『パンチ』の正式名称が『パンチ、あるいはロンドンのシャリヴァリ』(*Punch, or the London Charivari*, 1841-1992) であることによる。

37) “You did late review my lays, / Crusty Charivari; / You did mingle blame and praise, / Rusty Charivari. / When I learnt from whom it came / I forgave you all the blame, / Musty Charivari; / I could not forgive the praise, / Fusty Charivari.”

観を持つことなく読者が自身の判断をくだせるように、そこから数篇選んでみよう。

レクイエスカト〔安ラカニ眠リタマエ〕

そっと歩いてください、あの娘がそばに、
雪の下にいます。
静かに話してください、雛菊育つその音が
あの娘に聞こえているのです。

あの娘の黄金に輝く髪が
錆色に褪せている。
若く美しかったがあの娘は
一握の塵となった。

百合のような、白雪のような
あの娘は、自分がひとりの女として
美しく育つことを
ほとんど気づかぬまま。

棺の板が、重い墓石が
あの娘の胸の上に載っている。
わたしはひとり心を悩ます。
あの娘は眠っている。

どうかお静かに、堅琴の音やソネットの調べを
あの娘が聞こえなくなるので。
わが命のすべてがここに埋められている。
この上にどうか、土を重ねておくれ。³⁸⁾

この詩行にもまして甘美で哀愁に満ちたものがトム・フッド³⁹⁾の詩のなかにあるだろうか。私はないと思う。

ではもう一篇、同じように悲哀に満ちた詩を紹介しよう

38) “Requiescat” “Tread lightly, she is near, / Under the snow, / Speak gently, she can hear, / The daisies grow. // All her bright golden hair / Tarnished with rust, / She that was young and fair / Fallen to dust. // Lily-like, white as snow, / She hardly knew / She was a woman, so / Sweetly she grew. // Coffin board, heavy stone, / Lie on her breast, / I vex my heart alone, / SHE is at rest. // Peace, peace, she cannot hear / Lyre or sonnet, / All my life’s buried here, / Heap earth upon it.”

39) トム（トマス）・フッド（Thomas Hood, 1799–1845）は、ユーモア作家・詩人・編集者。「シャツの歌」（Song of the Shirt, 1843）で知られる。

朝の印象

テムズ川の青と金色のノクターン

転じてグレイのハーモニーと化す。

黄土色の干し草を積んだはしけ船が
埠頭より川下に出でる。冷たく寒く

黄色い霧がいくつもの橋の下に忍び寄り、
やがて家々の壁が影へと変わるかに見えた。
セント・ポールの聖堂が泡のごとく
街のうえに聳え立った。

それから急に暮らしの目覚めの音が鳴り響く
通りは田舎の荷馬車の往来でさんざめく。
そうして鳥が一羽、
輝く屋根へと飛んで行き、さえずる。

蒼ざめた女がただひとり
青白き髪を陽光にくちづけされ
ガス灯の炎の下をさまよう
炎の唇と石の心をもちながら。⁴⁰⁾

この詩集でもっとも長尺の詩「カルミデス」では、美青年カルミデスがミネルヴァの秘密の神殿に首尾よく入り込んでしまったがために、傲慢なる処女神が彼と彼を慕う乙女に対して復讐を果たす次第を語っている。この詩はオスカー・ワイルド氏の文体の長所と短所の両方に満ちている——古典的にして、もの悲しく、官能的で、言葉を駆使してのきわめて精妙な音楽的絵画のくだりに満ちている。しかしこれはまさにその甘美さによって鼻につくものにもなっている——微に入り細を穿っているために、あまりにも甘ったるいものになっているのだ。そのように書けるというのは単なる技巧ではない。それは横溢する想像力と言語を自在に操れる力量を示している。それゆえワイルド氏はこの紛うことなき天賦の才によって、いずれ「カルミデス」をも凌ぐすぐれた作品を生み出すことだろう。

40) "Impression du Matin." "The Thames nocturne in blue and gold / Changed to a harmony in gray: / A barge with ochre-coloured hay / Dropt from the wharf; and chill and cold // The yellow fog came creeping down / The bridges, till the houses' walls / Seemed changed to shadows, and St. Paul's / Loomed like a bubble o'er the town. // Then suddenly arose the clang / Of waking life; the streets were stirred / With country waggons: and a bird / Flew to the glistening roofs and sang. // But one pale woman all alone, / The daylight kissing her wan hair, / Loitered beneath the gas-lamp's flare, / With lips of flame and heart of stone."

詩人は自作品のなかで自身の個人的な見解を常時表現するわけではないし、そうするのは得策でもない。多様な精神を、多様な人びとの多様な感情を描き出すのが詩人の仕事なのだ。とはいえ、疑いなく、「女帝に幸あれ」に表現された思想はワイルド氏のものである。それを見ると氏が共和主義者であることがわかる。それも騒々しく下品な類ではなく、民主主義が行きわたるまで待つことに満足しているような静かで忍耐強い類の共和主義である。民衆による統治権力の掌握が彼らの望む変化を平和裏にもたらし、現行の体制の権力濫用を取り除くだろうという思想なのだ。

女帝に幸あれ

この嵐が吹き荒れる北海に位置せる

これらの休みなき潮^{うしお}の野の女帝たる

英国よ！ 汝のおみ足が世界を分かつ前に

人びとは汝について何を言わんとするのか？

* * * *

というのも、南風と東風が出会いしところ

剣と火に包まれ覆われて

英国は血まみれの裸足もて

広大な帝国の険しき道を上るゆえ。

* * * *

わが猛き戦^{いくさ}の鷺は飛び立ちて

激戦のさなか、広き翼をはためかす。

されど英国にひとり座す悲しき鳩は

いかなる喜びも抱かず。

娘は笑い、恋に輝く眼で恋人に挨拶せんとし

虚しく身がかがめる。

足元おぼつかぬ、かぐろき峡谷を下り、

旗を握りしまま、青年は死して横たわる。

あまたの月日は見るだろう、

物欲しげに居残っている子らが

父の膝にのぼらんと待っているのを。

して、荒れ果てた家々で

主を喪いし蒼ざめた女たちは

殺された者の遺物にくちづけるだろう

ある女は色褪せた肩章に、ある女は軍刀に、

かような苦悩を和らげてくれる哀れな玩具たち。

これら、わが同胞たちが死して横たわるは
静かなる英国の野にあらず
この地であらば、彼らの壊れた盾を
故人の最愛の花もて飾りたまうものを。

デリーの壁の傍らにて命果てし者もいれば
多くはアフガンの地に
また多くはガンジスの川が砂州の七つの口をとおって
落つるところにて、落命せり。

ロシアの水域にて横たわる者、
東方への入り口たる海域にて
倒れし者、はたまた
トラファルガルの風吹きすさぶ高台の傍らで果てし者。

おお、彷徨える墓！ ああ、安息できぬ眠り！
ああ、陽の射さぬ日の沈黙！
ああ、静かなる溪谷、ああ嵐吹きすさぶ海淵！
己の戦利品を手放すがよい！ 手放すのだ！

そして汝、傷が癒えることが絶えてなき者、
汝の疲弊せる種族は決して勝利せず。
おお、クロムウエルの英国よ！ 汝は
一インチの土地ごとに、ひとりの息子を生まねばならぬのか。

行け！ 汝の金冠の^{こうべ}頭に棘の冠を戴け。
汝の楽しい歌を苦悩の歌に変えよ
風と荒波が汝の死者らを捕捉せり。
二度と手放すことはあるまい。

勇者たち、^{つわもの}強者たち、艦隊は何処に？
我が英国の騎士道は何処にありしか？
野の草が彼らの埋葬の死衣、
してすすり泣く波の音が彼らの葬送歌なり。

おお、遠隔の地に眠る、愛されし者たちよ、
死した者の唇がいかなる愛の言葉を送れようか！

おお、朽ち果てし塵よ！ おお、知覚を失いし土よ！

これが最期なのか？ これで最期なのか？

静かに、黙したまえ！ 高貴なる死者たちに悪いではないか、

彼らの厳肅なるまどろみをかくのごとくかき乱したりしては。

子もなく、棘の冠を戴いてはいても

英国は険しい坂道を登らねばならぬ。

されど、この火の網が編まれしとき、

英国の番人に遠方より認めさせん、

若き共和国が、太陽の如く

これら深紅の戦の海から立ち昇るのを。⁴¹⁾

だが唯美派の詩の真の響きを理解せんとする者は、じっさいにこの詩集自体に向かわねければ
ならない。たとえ俗物^{フィリスティン}であつても彼がそうしたいと思ふなら、熟読の喜びを見出すかもしれない。あるいは、嘲り笑っているほうがよいと思う者には好きにさせておこう。そうした手合い
には憐憫の情しか感じられない——というのも、まことに、自然や芸術における美的なるものの

41) "Ave Imperatrix." "Set in this stormy Northern sea, / Queen of these restless fields of tide, / England! what shall men say of thee, / Before whose feet the worlds divide? // [. .] For southern wind and east wind meet / Where, girt and crowned by sword and fire, / England with bare and bloody feet / Climbs the steep road of wide empire. // [. .] Here have our wild war-eagles flown, / And flapped wide wings in fiery fight; / But the sad dove, that sits alone / In England—she hath no delight. // In vain the laughing girl will lean / To greet her love with love-lit eyes: / Down in some treacherous black ravine, / Clutching his flag, the dead boy lies. // And many a moon and sun will see / The lingering wistful children wait / To climb upon their father's knee; / And in each house made desolate // Pale women who have lost their lord / Will kiss the relics of the slain— / Some tarnished epaulette—some sword— / Poor toys to soothe such anguished pain. // For not in quiet English fields / Are these, our brothers, lain to rest, / Where we might deck their broken shields / With all the flowers the dead love best. // For some are by the Delhi walls, / And many in the Afghan land, / And many where the Ganges falls / Through seven mouths of shifting sand. // And some in Russian waters lie, / And others in the seas which are / The portals to the East, or by / The wind-swept heights of Trafalgar // O wandering graves! / O restless sleep! / O silence of the sunless day! / O still ravine! O stormy deep! / Give up your prey! Give up your prey! // And thou whose wounds are never healed, / Whose weary race is never won, / O Cromwell's England! must thou yield / For every inch of ground a son? // Go! crown with thorns thy gold-crowned head, / Change thy glad song to song of pain; / Wind and wild wave have got thy dead, / And will not yield them back again. // Where are the brave, the strong, the fleet? / Where is our English chivalry? / Wild grasses are their burial-sheet, / And sobbing waves their threnody. // O loved ones lying far away, / What word of love can dead lips send! / O wasted dust! / O senseless clay! / Is this the end! is this the end! // Peace, peace! we wrong the noble dead / To vex their solemn slumber so; / Though childless, and with thorn-crowned head, / Up the steep road must England go, // Yet when this fiery web is spun, / Her watchmen shall descry from far / The young Republic like a sun / Rise from these crimson seas of war."

真価を認めることのできる天分は、すべての人間に与えられているわけではなく、それを持ち合わせていない者は、色感を欠いた人のようなものだからだ。彼は感覚を欠いた者、あるいは音の響きに無神経な者であり、憐れむに値するのである。

ワイルド氏は、詩作に加えて、さまざまな散文の評論を書いている。キーツ論、1877年のグローヴナー・ギャラリー展の評、レネル・ロッドの詩集の序文がそうである。^{〔*原注2〕}また『ノラ、あるいは虚無主義者たち』⁴²⁾と題する戯曲も書いている。これは未だに上演されていない。おそらく民主主義思想に基づく強烈な場面が描かれているためだろう。このような戯曲は合衆国でのほうが受け容れられそう。なにしろ彼の地では王室につながる愛想のよい老紳士に劇の検閲を委ねたりしていないのだから⁴³⁾。王室はといえば、ヨーロッパのあらゆる専制君主と婚姻によってつながっている——彼らの暴政と弾圧に対するワイルド氏の齒に衣着せぬ非難に腹を立てる者もそのなかには多少いるかもしれない。

〔*原注2〕レネル・ロッド著『薔薇の葉と林檎の葉』（Rennell Rodd, *Rose Leaf and Apple Leaf*）、オスカー・ワイルド序文（フィラデルフィア：J. M. ストダート社、1882年）。優美な小型本の詩集で、きわめて精巧な美装が施されている。薄手の透き通った手製の羊皮紙の片面にだけ印刷面が占めていて、薄い青林檎色の紙が差しはさまれている。印刷面をとおして見えるその繊細な色合いは読者の目にきわめて優美に感じられる。挿絵は断然日本風で、函は白のヴェラムで作られている。オスカー・ワイルドの序文は（散文で書かれているとはいえ）詩を称えた詩のように読める。文体がいささか込み入っていると思われるかもしれないが、その言葉遣いが豊かで音楽的であるからだ。

唯美主義の第一原則とは、すべての洗練された芸術が互いに密接に関係していることである。それゆえ、その派の詩人たちが画家でもあったこと、その一方で、その派の美術家たちが、自身の主要な絵画や彫刻の主題として詩人たちの創作物を主に利用してきた次第を私たちは見てきた。

ワイルド氏の詩作品を扱ってきたので、彼が引き受けた芸術講演者と衣装改革者という他の2つの能力における業績について次に述べる必要がある。その双方の資質において彼は詩人としてよりも世間一般に広く知られるようになったのかもしれない。

『ペイシャンス』に登場するアーチボールド・グローヴナーの原型として、ワイルド氏はギルバート氏の寸劇における快活な風刺に微笑を浮かべる余裕が充分にあった。そこには確かに悪意が見られないからである。しかし、『パンチ』誌のなかで氏はかくも長きにわたりジェラビー・ポッスルウェイトとして描かれてきて、その不機嫌で下品な個人攻撃はとても笑えるものではない。その一方で、彼らが具現した悪意は、『大佐』のなかで入念に再現されている。そこではランバート・ストレイクという人物は、ベテン、卑俗、偽善の典型として示されている。主たる違いは、

42) ワイルドの戯曲は正確には『ヴェラ、あるいは虚無主義者』（*Vera, or the Nihilist*, 1880）のため、「ノラ」（Nora）はハミルトンが間違えて記載したものと考えられる。

43) イギリスでは演劇検閲法によって宮内長官（Lord Chamberlain）検閲の所管と定められていた。なお、じっさいに『ヴェラ』の初演がなされたのはニューヨークのユニオン・スクエア劇場においてだった。マリー・プレスコット（Marie Prescott, 1850–93）がヴェラを演じたこの初演は1893年8月28日に初日を迎えたが、あいにく不評で、一週間で打ち切られた（Sturgis, pp. 292–95）。

『パンチ』誌のJP〔ジェラビー・ボッスルウェイト〕の寸劇はオスカー・ワイルドに向けられていることが広く理解されているのに対して、『大佐』のランバート・ストレイクは、あまりにも下品で不快感を抱かせる人物にされているため、ボッスルウェイトについてのデュ・モーリエによる陳腐なジョークのいくつかが複製されたものの、ストレイクとワイルドをあえて結び付ける人などいなかったという点にある。しかし、『大佐』の作者、というよりは翻案者が『パンチ』誌の編集長でもあったこと、そして読者層であれば昔から当たり前のように知っていたさまざまな種本をもとにバーナンドが『大佐』をまとめるよりも以前に、デュ・モーリエが新しい唯美派を風刺していたことを忘れることはできない⁴⁴⁾。

唯美派に対して大衆が浴びせる嘲笑は、部分的にはオスカー・ワイルド氏がもたらしたものであることに疑いはない。氏の特徴的な身なりに諷刺顔の批評家たちが飛びついたのだった。連中ときたら、氏の詩作品よりも氏の穿いている半ズボン^{ニー・フリース}を笑うほうが簡単だと知っているのだ。なにしろ連中のほとんどは氏の詩作品を読んでいないように見受けられるからである。

唯美派についてのごく一般的な見解は、「同人の栄光を高めるために、互いに褒めちぎることでことさらに熱気を帯びた、内輪褒め集団」というものであるようだ。そうした誤解を多少晴らすために、私は唯美派につながる主要人物の何人かをすでに挙げてきた。そしてラスキン、スウィンバーン、ロセッティ兄弟、モリス、E. バーン＝ジョーンズといった名前、加えてその派の倫理体系を熱烈に支持する数多の芸術家たちを見て、いま一般の人びとはみずからの意見を形成すべきであり、もはや陳腐な似非漫画雑誌から得た受け売りの観念に頼るべきではない。

人びとは少なくとも、唯美主義運動がもたらした改善点を銘記すべきである。家具、家屋の装飾をはじめとする芸術の諸部門において近年大いなる改善がその運動によってもたらされてきた様子が見て取れるのである。

44) フランシス・バーナンド (Francis Burnand, 1836-1917) は当時の『パンチ』の編集長を務めると同時に、『大佐』の作者でもあった。このため、唯美主義者やワイルドを『パンチ』で風刺することは、彼らをモデルとした『大佐』の宣伝の役目も果たしていた。(川端ほか『ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義(1882年)試訳と注解(1)』23頁、注釈9および10を参照)

参考文献

- Ellman, Richard. *Oscar Wilde*. Hamish Hamilton, 1987.
- Hamilton, Walter. *The Aesthetic Movement in England*. 3rd ed. Reeves & Turner, 1882.
- Showalter, Elaine. *Daughters of Decadence: Women Writers of the Fin-de-Siècle*. Rutgers UP, 1993.
- Speranza (Lady Wilde). *Poems*. Cameron & Ferguson, n. d. [1871.]
- Sturgis, Matthew. *Oscar: A Life*. Head of Zeus, 2018.
- Tennyson, Alfred. *The Poems of Tennyson*. Edited by Christopher Ricks. Longmans, 1969.
- Wilde, Oscar. *The Complete Works of Oscar Wilde*. Collins, 2003.
- . *Ravenna*. Newdigate Prize Poem Recited in the Theatre, Oxford, June 26, 1878. Thos. Shrimpton and Son, 1878.
- 川端康雄・井上亜紗・海老名恵・押田昊子・花角聡美「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』（1882年）試訳と注解（1）」『日本女子大学文学部紀要』第69号、2020年。19-40頁。
- 川端康雄・井上亜紗・海老名恵・押田昊子・花角聡美「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』（1882年）試訳と注解（2）」『日本女子大学文学部紀要』第70号、2021年。49-63頁。
- 川端康雄・井上亜紗・海老名恵・押田昊子・花角聡美「ウォルター・ハミルトン『英国の唯美主義運動』（1882年）試訳と注解（3）」『日本女子大学文学部紀要』第71号、2022年。69-93頁。

川端 康雄（かわばた・やすお 日本女子大学名誉教授）
井上 亜紗（いのうえ・あさ 武蔵野大学准教授）
海老名 恵（えびな・めぐみ 日本女子大学非常勤講師）
押田 昊子（おしだ・こうこ 日本女子大学文学部英文学科助教）
花角 聡美（はなずみ・さとみ 昭和薬科大学講師）